

2020年度の年間の活動

1. 全世帯参加の環境整備、景観形成活動

コロナ禍の中、「過密」を避ける意味から会合が制限される中、私たちのような農村部はいつも「低密」状態。例年通りの活動をおこなっています。2020年度は延べ500人の参加がありました。

- 花巻八景の「立岩」草刈り（2回）
- 公民館周辺の草刈り（2回）
- 花巻市文化財「桜」の管理（2回）
- 共同墓地周辺整備（1回）
- 遊休農地の管理（1回）
- 林地管理（1回）
- 農業用水路の管理（2回）
- 道路管理（5回）
- 花壇の手入れ（2回）
- 小グループによる特定地区の整備（随時）



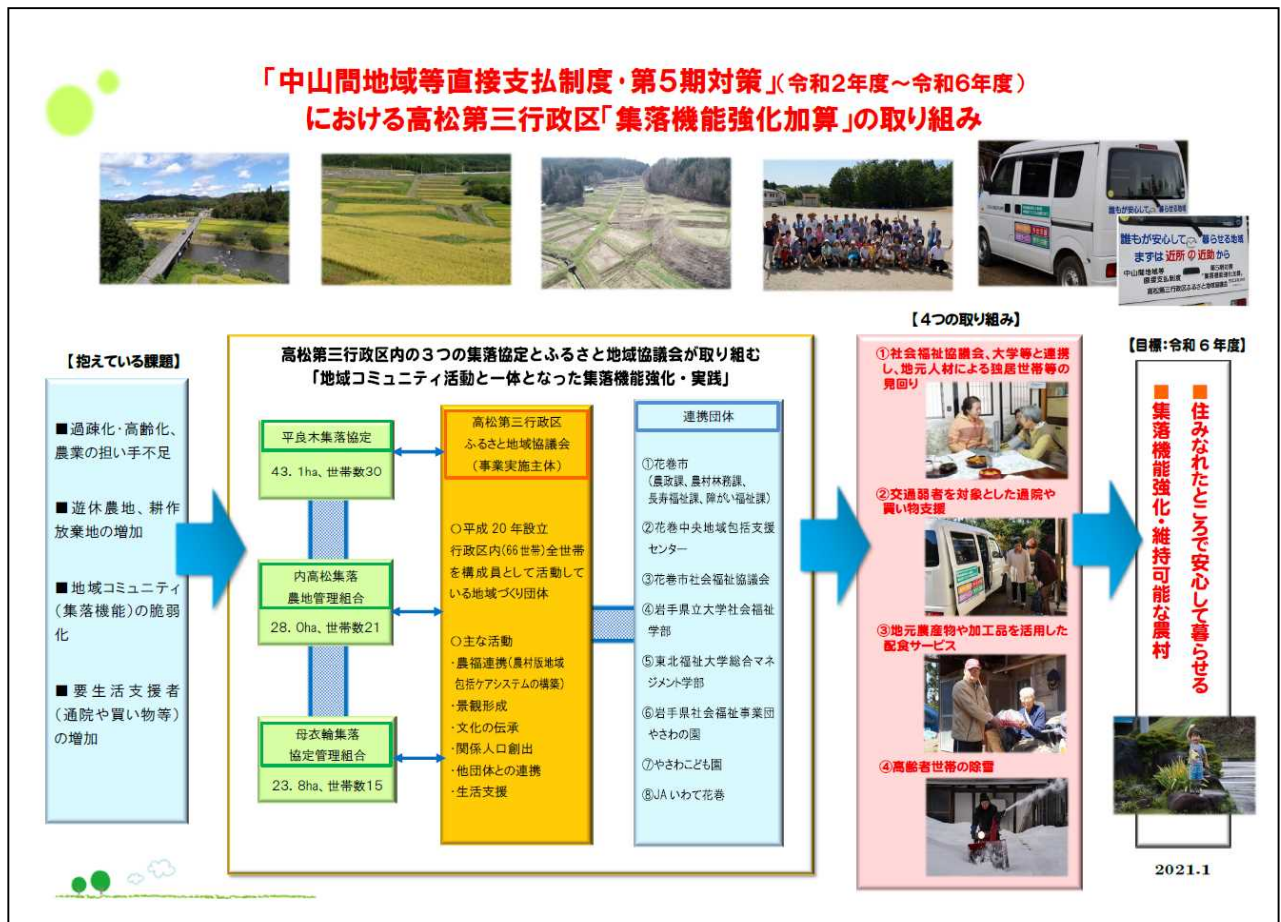
2. 地域の暮らしを守る「集落機能強化活動」

少子高齢化が進む地域の中では「過疎化・高齢化」や「遊休農地や耕作放棄地の増加」、「地域コミュニティの脆弱化」、「要生活支援者（通院や買い物等）の増加」など課題が山積している。このような課題を解決しなければ『住みなれたところで安心して暮らせる』という目標は達成できない。

そこで、ふるさと地域協議会では2020年度から農林水産省が新たに打ち出した「中山間地域等直接支払制度第5期対策」の「集落機能強化加算」を活用して、地域の暮らしを守る取り組みを始めている。

具体的には下記の①～④を実施している。詳細は別紙事業概要図参照

- ① 「社会福祉協議会、大学等の連携し、地元人材による独居世帯等の見回り」
- ② 「交通弱者を対象とした通院や買い物支援」
- ③ 「地元農産物や加工品を活用した配食サービス」
- ④ 「高齢者世帯の除雪」



特に、④の高齢者世帯の除雪は、2020年度が大雪であったために高齢者世帯から非常に喜ばれ、地区の中でお互いが支え合う「互助」の仕組みができた有意義な取り組みであった。

受賞を契機に新たに取り組んでいること

1. ドローンによる四季の映像撮影

- まだ知られていない、地区内の見どころ撮影
- 撮影した映像を編集し、地元出身者を中心とした「ふるさとネットワーク」会員への提供をおこなった。



2. 関係人口の創出、外部人材を活かす社会実験

高齢化が進む中で、地区内農地や周辺の草刈り作業は地区住民だけでは限界に近づいてきており、連携団体のひとつである岩手県立大学の学生による草刈り作業の社会実験をおこなった。

参加した生徒から「貴重な経験をすることができた、ぜひ後輩に引き継いでいきたい」との感想が寄せられ、次年度へ弾みがついた。

また、コロナ禍にもかかわらず福祉農園の公開日（9～10月）には、高齢者、障がい者、子どもたちが収穫体験に訪れ、延べ参加人数は1,000人になった。



3. 受賞を契機に新たな景観形成へ

現在、行政区内では小さな農地を大きくして作業効率を上げるための「農地整備事業」が始まろうとしている。

それに合わせて行政区内の各集落の要所ごとに住民が花木の植栽を継続して行うことにしている。このことにより地区内の景観形成がさらに進むものと期待している。



維持管理活動支援費の用途

- 花木苗木購入
- 四季の映像撮影・編集
- 受賞記念クリアファイルの製作、配布
- 受賞記念タオルの製作、配布

近い将来取り組まなければならない課題

これからも「住民主体、連携団体との協働」により、2019年9月に策定した『福祉農園から始まる農村版地域包括ケアシステム構築ビジョン』に示された「住みなれた高松で安心して暮らしていきたい」との目標に向かって、ひとつひとつ課題を解決していきたい。

《ビジョンに示されている主な内容》

- ① 高齢者の知恵と技を活かす生涯現役の場創設
- ② 農福連携による関係人口の創出
- ③ 生活支援（病院への通院、買い物、配食サービス、除雪・・・）
- ④ 地元出身者を中心とした新たなネットワークづくり
- ⑤ 人と人との関係をつなぐ「近所の近助」運動

《連携団体》

- ① 花巻市（農政課、農村林務課、長寿福祉課、障がい福祉課）
- ② 花巻中央地域包括支援センター
- ③ 花巻市社会福祉協議会
- ④ 岩手県立大学社会福祉学部
- ⑤ 東北福祉大学総合マネジメント学部
- ⑥ 岩手県社会福祉事業団やさわの園
- ⑦ やさわこども園
- ⑧ JAいわて花巻